



会報 2023 年 10 月号

日本ニュージーランド協会 (関西) 創立 1970 年 11 月 11 日

New Zealand Society of Japan, Kansai

Autumn has come the window of pillows, coming to my ears.

(Mastuo Basho)

長かった猛暑の夏が過ぎ、急速に秋がやってまいりましたが、ご健勝のことと存じます。コロナ禍のニュースが少なくなりましたが、油断大敵です。安心・安全に配慮してお過ごし下さい。9月30日には3年間中止しておりましたラム肉調理・試食例会を盛況に開催することができました。今後も通常の活動ができることを期待しておりますので皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。



Arataki Road, Havelock North (松沼清司)

第 286 回例会: 11 月 11 日 (土) イングリッシュガーデン・ローザンベリー多和田 (米原)

読書の秋 特別見学会: 11 月 15 日 (水) 京都府立図書館 (岡崎)

第 287 回例会: 12 月 7 日 (木) 関西日仏学館・ヴィラ九条山 (京都)

第 288 回例会: 12 月 23 日 (土) クリスマス例会 神戸倶楽部

【事務局】日本ニュージーランド協会 (関西)

〒558-0004 大阪市住吉区长居東 2-17-28, 407 (石井気付)

電話・Fax:06-6607-2112

<http://nzsocietykansai.com> E-mail:nzsjk@yahoo.co.jp

■ イングリッシュガーデン・ローザンベリー多和田見学会

開園直後の 2012 年 6 月に例会で訪問、10 年経過した庭園等は四季折々の植物が整備されています。NZ の鼻の黒い羊 3 頭は全国でもこちらだけで見れます。

秋のハイキングを兼ねてご参加下さい。(詳細：同封パンフレット参照)

とき 11 月 11 日 (土)

- 集合: JR 米原駅 12 時 タクシー分乗で 15 分
- 昼食は BBQ (大沢ワインからワインのご提供あり)

参加費 4000 円 (入場料・昼食代)

交通 大阪発 10 時 30 分 米原着 11 時 53 分 (新快速・1980 円)

定員 無し、11 月 4 日までに事務局へお申込み下さい。

詳細 11 月 6 日頃にお知らせします。

■ 読書の秋 特別見学会・京都府立図書館

平安神宮の大鳥居の隣です。オフ例会的な見学会として開催します。図書館は毎月第 3 水曜日に公開見学会。100 年を越える歴史、蔵書約 120 万書の館内見学 40 分。

「生まれた日から今日までの新聞が自由に読めます」

とき 11 月 15 日 (水) 14 時から 40 分

集合 図書館内受付近辺 13 時 45 分

参加ご希望者は 11 月 8 日までに事務局へお申込み下さい。

定員 10 名 参加費 無し

■ 関西日仏学館・ヴィラ九条山見学会



建物正面と屋上テラス

「アーティストインレジデンス」、フランス政府の欧州・外務省の文化施設として 30 年前に開館した施設。京都市を見下ろす山の中腹にあり、最大 6 名の中堅・若手のアーティストが 4 か月から 6 か月滞在し活動しています。今回は公開日を利用して見学させていただきます。施設のスタッフが通訳もされますが、英語も通じるようです。

とき 12月7日(木) 14時から15時30分

- 集合: 京都市国際交流会館ロビー(蹴上) 13時30分 タクシー分乗で約7分
- 解散: 15時30分現地、地下鉄 蹴上駅には徒歩15分程度
- 京都市国際交流会館: 地下鉄 蹴上駅2番出口3分 TEL:075-753-3010

定員 無し、11月30日までに事務局へお申込み下さい。

昼食 交流会館 喫茶コーナーの軽食かロビー奥のテーブルでお弁当など(持ち込み可能)。

■ クリスマス例会

久しぶりに神戸倶楽部(KC)での開催となります。KCはリニューアルのため来年の夏ごろから暫く休館になるそうです。KCはお料理と会場の雰囲気が人気です。ご家族・友人などをお誘いあわせてご参加下さい。

とき 12月23日(土) 11時30分~14時30分

ところ 神戸倶楽部(KC) TEL:078-241-2588

- 中央区北野町・トアロードの突き当り
- 三宮から車で10分、徒歩20分

定員 40名 **参加費** 7000円

申し込み 12月15日までに事務局へお申込み下さい。

16日以降はキャンセル料が必要になる場合もございます。

催し物 ・プレゼント交換(500円~1500円程度の品物をご持参下さい。・バザー(品物のご提供をお願いします。)
・NZクイズ・ビンゴゲーム・近況報告
・アトラクション(当日のお楽しみに)



KC 神戸クラブ

■ 初めてのホストファミリー体験

初めに簡単に自己紹介させていただきます。朝公園に隣接しています（一財）大阪科学技術センターに勤務しております。貴協会の石井さんは職場の先輩でして、7月の大阪科学技術館のリニューアルオープンオープンの時に久しぶりに再会しました。その際、我が家がNZからの留学生受け入れを9月にすることをお話したご縁で、今回の原稿依頼と入会のお誘いをいただきました。ご承知の通り職場がある朝公園は市内でも美しく整備された公園で知られており、秋には野外彫刻展が開催されます。公園に隣接している大阪科学技術館は、産業界等の最新技術が展示されていて入館料は不要です。お気軽にお越しいただければ幸いです。

2023年の9月初旬に、初めてホストファミリーとして、ニュージーランドからの中学1年生の留学生を1週間我が家に迎えましたので、体験談としてご紹介します。きっかけは、私の中2の息子（壮佑）が通っている私立中学校の国際教育プログラムで、BHBI (BlockHouse Bay Intermediate School) から約20人の学生が来日する際、受け入れ可能なホストファミリーを募集していたことです。私は以前にカナダに、妻はカナダとオークランドに大学生の時に短期間のホームステイをした経験があり、この機会が家族全員にとって貴重な経験になると考え、応募しました。



カードを楽しむ

しかし、受け入れ日が近づくにつれ、部屋の準備、家でのルール、食事メニュー、連れて行きたい場所、さらには会話のための翻訳アプリなど、慣れない準備に追われました。また、親は日常会話レベルの英語に対応できるものの、息子と娘（小6）は英語を勉強しているも英会話の機会が少ないため、この点に対する不安がありました。

学校経由で受け入れる留学生の男子、ジョシュアのプロフィールが届きました。彼は野球と犬が大好きで、ソフトボールのクラブで2度代表を務めた経験があり、日本では寿司とみそ汁に挑戦したいとのこと、最近サイエンスバッジを収集しているとのこと。しっかりと印象を受けました。学校のメールアドレスが記載されていたので、事前に食事のメニューや温泉についての意向をやりとりすることができました。

そして、待ちに待った対面の日がやってきました。緊張の瞬間でした。大きな荷物を持ったジョシュアと他のニュージーランドからの学生たちが、待ち合わせ場所である中学校の食堂に入ってきました。紙に自分の名前が書かれているホストファミリーを見つけ、手を振りながら近づいてきました。ジョシュアも自分の名前を見つけると、ぱっと笑顔になり、家族全員と握手して対面を果たしました。お互いに緊張しており、何を話せばよいか分からず、顔を見合せては笑顔で頷くという不思議な時間が流れました。家に帰る車の中では、Google翻訳のアプリを使って会話を試みたり、自分で英文を考えて話してみたりと、息子も色々挑戦をしました。なお、ジョシュアは全く日本語を話せません。

家に帰ると、我が家のトイプードルと対面しました。ジョシュアは大の犬好きなのですぐに仲良くなり、遊び始めました。その日の夜は回転寿司に行きました。生の魚には抵抗がある

ようで、ハンバーグやいなり、フライなどを中心に食べていました。寝る前に、「サイエンスバッジ」について質問しました。ジョシュアは Science Award Trust という科学技術団体が発行するバッジを4つ持っています。バッジは、学生が自分で選択したトピックに関する実践的な科学活動を完了すると授与されるもので、農業、天文学、植物学、エレクトロニクス、エネルギー、昆虫、海洋生物、気象など30種類ほどあります。特に、法医学のバッジを学校で初めて取得したことを誇らしげに話してくれ、指紋や髪の毛を顕微鏡で観察し分析し、レポートを書いたとのことでした。この話からジョシュアの知的好奇心の高さが伺えました。

子供たちは、けん玉に挑戦したり、カードゲームを楽しんだりしました。2日目の朝、ジョシュアはいつも小食だと言いつつ、シリアル、フルーツ、ヨーグルトを少しずつ食べました。ピーナッツバターが大好きと聞いていたため、駅地下のスーパーで見つけた SKIPPY というピーナッツバターを買って帰りました。これが彼にとっては久しぶりの味で、喜んでくれ、次の日から朝食はパンにしました。家族も大好きだということで、お土産にもう一つ買い足してプレゼントしました。また、今日学校で行われた体育大会のビデオを一緒に見たり、Wii Sports というTVゲームで野球やボウリングを楽しんだりし、一体感のある時間を過ごしました。

5日目には、BHBIの生徒とホストファミリーの生徒と一緒にUSJで遊びました。JAWSのアトラクションやハリー・ポッターのドリンク、ショッピングなど、楽しい時間を過ごしたようです。夜には初めての温泉とサウナでリラックスし、ロースカツを美味しく食べました。温泉のテレビで阪神タイガースの優勝試合を観戦できたことも嬉しかったようです。

6日目には、ジョシュアが最後に食べたいと

言っていたステーキをファミレスで楽しみました。彼は1ポンドの最も大きなサイズのアンガスビーフを美味しく全部食べました。帰宅後、ジョシュアは持ってきてくれたお土産をプレゼントしてくれ、それぞれのアイテムについて説明してくれました。



ジョシュアと壮佑

そして、あっという間に最終日の7日目がやってきました。朝、私たちはジョシュアに我が家からのお別れメッセージと滞在中の思い出を詰め込んだ色紙をプレゼントしました。彼は色紙をじっくり読み、涙を流しながら「ありがとう、ありがとう」と言ってくれました。学校の正門でBHBIの生徒たちを見送り、お別れの瞬間がやってきました。私自身、急に寂しさを感じ、何か話すと涙がこぼれるほどでした。ジョシュアは精神的に大人で賢い子供であり、彼の考え方や行動、気配りから多くの刺激を受けました。この体験で共に過ごせた時間に感謝しており、将来的にもホストファミリーとして留学生を迎え入れたいと思っています。いつかニュージーランドを訪れ、ジョシュアと再会できることを楽しみにしています。

10月から貴会に入会させていただきましたので、よろしくお願い申し上げます。

(篠崎圭吾)

■ 黒部の太陽 (臨時例会報告)

映画はじめのクレジットタイトルが流れる。懐かしい俳優の名前に続き、音楽・黛敏郎と見ていくうちに、完璧に気分は昭和ど真ん中へタイムスリップしてしまっている。しばし流れる画面に映る、北アルプスの雄大な自然と季節の流れを見てみると、美しく雄大なればこそその神秘性や自然環境の厳しさを感じる。遡ること大正のころから、黒部での水力発電の可能性の調査がされていたが、厳しい自然条件のため長らく建設計画には至らなかったようだ。黒部渓谷の絶壁の岩を削って50センチ幅ほどの道を作っていく、そこを調査のための機材などを担いで運ぶ人が、機材を岩に引っかけて滑落するシーンに、ダム建設工事、その準備のため工事が始まる前の段階から、多くの人の命がけの作業の連続だったことを思い知らされた。

この時点で、私の中学一年の夏の記憶が蘇った。関電トンネルトロリーバスが営業を開始して早々、父に車で黒部ダムへ連れて行ってもらった思い出だ。今と違って、トロリーバスのトンネル内はもちろん、外へ出てみんやりとした感覚だったと思う。父はダムへ向かう前に、殉職者慰霊碑の前で、このダムを建設するための工事が世紀の難工事だったという話をしてくれた。まさに今回の映画シーンのようなものを当時子供なりに想像できたなあと、久しぶりに当時の父を思い出したりした。とにかく、黒部ダムを初めて見た時の思い出は今でも鮮明だ。その黒部ダムが還暦を迎え、同時に自分も経てきた年月の長さを改めて実感した。映画の始まりとともに、私の頭の中では、今見ている映画と60年前の少年時代が妙に重なり合う有様だった。

黒部ダムが完成した当時というのは、真っ先に思い出されるのは、黒部ダム完成翌年に開催

された東京オリンピックで、オリンピック関連施設の建設だけでなく、東京～大阪間の東海道新幹線の開通、首都高速道や名神高速道路の建設などがどんどん進んだ。まさに日本の高度成長の真ただ中で、日本の広い範囲で、インフラ施設整備の大きな土木建設工事が行われ、子供の目にも、目を見張る変化を遂げていく時代だった。そして、この変化を担っている人は、自分の両親あたりを中心にした前後の世代の人たちだったのだろう。映画が始まって早々、これらのことが脳裏をかすめた。

少年時代の思い出と渾然一体となった『黒部の太陽』を、映画の流れに従って振り返ってみたい。



戦後の日本の経済復興を経て、高度経済成長の時代に、関西地方の深刻化する電力不足を補うために、水力発電の適地とされながらも、非常に厳しい自然条件のためにダム建設を阻んできた黒部川に、黒部ダム・黒部川第四発電所の建設に挑戦する決定が下された。総指揮を執る太田垣社長は工事の総責任者に北川(三船敏郎)を指名し、現場主任には岩岡(石原裕次郎)の父であるゼネコン下請け会社社長の源三(辰巳柳太郎)が着任する。源三は工事遂行のためには犠牲をも顧みない昔気質なところがあり、かつての作業事故で岩岡の兄を失くしており、父の強引なやり方に岩岡は反発した思いを持ち続けていたようだ。

とある日、北川の家で酒席が開かれ、メンバーの計らいで北川の長女・由紀と岩岡は見合いすることになる。ダム建設工事に先立つ資材運搬用のトンネル掘削工事の話が出た際に、岩岡が初対面の北川に向かって、トンネル掘削予定地には破碎帯と呼ぶ、岩が細かく割れ、地下水をため込んだ軟弱な地層があることを指摘し、難工事になるだろうという自らの見解について語る。これを聞いた北川が怪訝そうな表情で、そんな問題の話をしたのは君が初めてだと、岩岡の説明に耳を傾け、そして岩岡に目をやり頷く。北川なりに困難に立ち向かう覚悟を決めたように思えた。岩岡は、困難点は困難点としてきちんと関係者に伝えた上で事にあたろうとしており、この時点で北川は岩岡の技術者としてあるべき真摯な姿勢に対して、深い信頼感を抱き、信頼できる人物だと確信したと思う。ほんの一瞬だが、このシーンは大変印象に残り、自分も技術者の端くれとしてすごく好感を持ったシーンだ。岩岡の、技術者としての姿勢には共感を覚える。ついこの間まで、バッドニュース・ファーストとか、悪い情報こそ早く漏らさず報告、と言い合って仕事をしてきたことを懐かしく思い出した。昭和40年代の映画であるが、こうした正直で真摯な技術者の姿勢が表現されているところに妙に親近感を感じた。黒部ダム建設の資材を運ぶ長野県側から、富山県側へ抜ける大町トンネルを掘削するにあたり、まずは工事用の資材を運ぶ道を作るところから始まる。道は断崖絶壁の細い道、荷物を背負い目的地に運ぶのも命がけだ。渓谷での工事を始めるにはそのために必要な資材を人力で山中へ運び込むことから始まり、それらを機材に組み立て、人が長期滞在する住居環境を整備し、トンネル掘削の大型機材の組み立て、トロッコレール設置などの準備作業をして初めて本格的なトンネル掘削工事がスタートできるわけで、その

工事も重量物運搬ルートを作りながら進めることになる。

いよいよ始まるトンネル掘削工事は、事故などもあり大変なものであったが、程なくして体調不良を訴えた現場主任の父（源三）の代わりに、岩岡が、トンネル掘削の責任者を務める決意することになる。その後もトンネル掘削は、何人も犠牲者を出し苦戦する。やがて、岩岡が危惧した破碎帯に突き当たる。関連資料によれば、トンネル入り口から約1600mの地点で、最大毎秒660リットルもの地下水と大量の土砂が噴き出したそうだ。これにより大規模な落盤や水漏れが発生して工事は一時中断を余儀なくされる。しかし、技術者たちは地質学者の助力を得ながら様々の技術プランを立て、水抜き用のパイロットトンネルを掘りながら作業を進めていく。そんなある日、北川の家から現場に、次女の牧子が倒れたという電報が届く。診断結果は白血病で、余命1年を通告されていた。家族や周囲の計らいで、余命1年ということは伏せた上で北川を一時的に家に戻させるが、大仕事を前にゆっくりとそばにいることはできなかった。その一方でトンネル工事は、水抜き作業と難工事が続き、難工事の恐怖と相次ぐ犠牲者発生で現場には不安感が漂い、辞めていくものが続出するなど工事継続の危機に直面する。この状況を打破すべく、関係技術者が知恵を結集したありとあらゆる有効な手段、そのために必要な資金を思い切って投ずる経営トップの英断があり、現場最前線の作業員、これを束ね安全を確保しつつ難工事に挑む現場責任者、施工技術者の士気、全関係者の使命感と勇気が絡み合って難工事が進捗し、最大の難所である80メートルの破碎帯を約7か月かけて突破する。その後も掘削工事は続けられ、北アルプスを貫く大町トンネルの貫通を迎える。

トンネル貫通で現場の作業員が歓声に沸く

中、北川は次女の牧子が亡くなったという電報を受け取る。文面は『貫通期しつつ牧子死す』というようなものだったと思う。この文面には、悲報を知らせるだけでなく、死つつある牧子とそれを見守る家族の、難工事完遂に向け現場で奮闘する北川への励ましの気持ちが込められており、家族の北川への思いやりと、勇気づけようとする気持ちが痛いほど伝わってくる。この電報を見たときの北川の動揺と悲しみの表情の中に、『わかった、やりきるぞ』という、旅立つ牧子への強い決意表明のようなものを感じた。トンネル貫通現場では、娘の死への深い悲しみを心の奥にしまい、現場作業員たちに難工事の労いの言葉をかけ、トンネル貫通を祝う鏡割りを行い、関係者全員が互いを労いトンネル貫通を祝うシーンは感慨深い。

そして、この大町トンネルの貫通後も工事は進み、いよいよ黒部ダム建設工事が本格的に始まる。それから約4年後に黒部ダムが完成する。映画のラスト、北川と岩岡がしみじみと黒部ダムの壮大な光景を見入るシーンがある。このシーンは、自分が中学一年のときに眺めた黒部ダムの思い出と重なり、両者が共鳴し合いぐっとくるものがあった。

映画を見終わって、あらためて感じたことは、必要なことであれば困難なことも、困難から逃げるのではなく、その困難を的確に理解し、その困難を克服する方法を探り、衆人の知恵を絞り、勇気を持って皆で立ち向かうことの大切さ、そして実際に多くの人々がこれまで実行してきたという現実だ。映画の中では主として北川と岩岡、その家族のことがクローズアップされているが、当然多くの工事関係者、その家族にも、多かれ少なかれいろいろな事情や出来事があったと思われる。現場労働者、現場監督者、工事責任者、企業幹部や経営層、またその家族など、この苦しい難工事の影響を何らかの形で受けな

がらも、皆それぞれ自分なりに気持ちを整理して、勇気をふるいおこし自他ともに励まし合う日々を過ごされたのだろう。日本の高度成長期に入っていくための、また国民生活の豊かさ、発展を支えるインフラ整備事業の一つひとつがこの時代に構築されてきたのだなあとしみじみ感じるとともに、みんなのおかげで今があるとあらためて感謝の意を表した次第である。



黒四ダム

(柴田雅裕)

追記

1. 当会の臨時例会(7月21日)として中央電気倶楽部主催の映画鑑賞会「黒部の太陽」に参加された柴田さんは少年時にご両親と黒四ダム見学をされたと伺い、寄稿をお願いしましたところ快諾いただきました。
2. 「クロヨン」で知られる黒部川第4発電所の建設は関西電力が世界銀行から総工費513億円(当時)の約4分の1の融資を受け7年の歳月と171名の尊い犠牲者を出し完成しました。4機の発電機で約39.5万KWを発電しています。11月

30 日までが観光期間です。

3. ニュージーランドの電力は約 79%が自然エネルギーから賄い 2025 年までには 90%にする計画。約 40 年前にマナポウリ湖の豊富な水を利用してダムと水力発電所の建設計画持ち上がり、多くの国民の反対により、環境保全のため湖底に発電所が世界初で建設されました。発電所見学は人気があるそうです。

■ ラム肉調理・試食会報告



9月30日の午後、とよなか国際交流センターで24名の参加者があり盛況に開催されました。2019年の神戸以来のラム例会でしたが、豊中は会場アクセスがよく、仕器も整い、同じ建物の地下にはスーパーもあり便利でした。メインは、香草パン粉焼きと味噌大葉焼きの2種類、NZ産ミルクを使ったアイスクリームとキーウィフルーツのデザート、各自持ち込みのワイン・ビール、初参加の方はNZ産ラム肉(生後4~6ヶ月で出荷、オーストラリア産は6~8ヶ月)の美味しさに舌鼓を打っておられました。中村さんは次男さんの開発された鳥取県産の「星空舞」を提供いただきました。・ご飯のツヤが際立つ美しい炊きあがり・粒感があり跳ね返る食感・冷めても食感が変わらず美味しいなどの特徴があり、星空舞のおにぎりは好評を得ました。参

加者の近況報告の後に分領さんがお得意の手品を10分程度披露されました。来年も開催できることを期待して閉会しました。



追記 とよなか国際交流センターでは国際交流は勿論、文化行事・ボランティア活動などの情報が入手できますのでお気軽にお立ち寄りください。

■Do you know him?

NZ出身の日本代表のラグーマンをご存知ですか? ワーナー・デイアンズさん21歳。NZ出身のラグーマンはリーチ・マイケルさん等がよく知られていますが、ワーナーさんは最も若い日本代表です。詳しくは同封の毎日新聞の記事をお読みください。フランスで開催されている今年のワールドカップはどこが優勝するのでしょうか。10月29日の決勝戦にオールブラックスは出場するのでしょうか?



■ 図書・DVD の貸し出し

- ・ニュージーランドに魅せられて (川瀬勇)
 - ・先住民族社会の形成と存続
 - ・NZ 南島ナイトフ族の伝統と社会 (原田敏治著)
 - ・ニュージーランド 俳句の旅 (黛まどか)
 - ・NZ の大らかで自然に寄りそう暮らし (草野亜希子)
 - ・60 歳、ハウスイフのホームステイ (中村淳子)
 - ・高熱隧道 (黒部第 3 ダム 吉村昭)
 - ・黒部の太陽 (DVD 196 分)
 - ・ニュージーランドの若大将 (DVD 86 分)
 - ・クジラの島の少女 (DVD 101 分)
- ご希望者は事務局へご連絡ください。

■ 新会員募集

NZ に関心のあるご友人・知人に入会をお誘い下さい。

.....

■ 今後の運営等について

お陰様で当会は 3 年前に創立 50 周年を迎えることができましたが、今後の運営等についてご意見をお寄せ下さるようお願い申し上げます。

■ ご寄稿のお願い

NZ の社会状況・旅行経験・趣味等の原稿をお待ちしています。次号 3 月号の締め切りは、2 月末です。

■ 50 周年記念マグカップ

在庫が少なくなりましたがご希望の方には郵送・手渡しで配布いたします。電子レンジ専用です。1 個 1000 円、送料 800 円

